



チェルノブイリ・ヒバクシャへの支援・交流の経験を活かし

福島原発事故被災者への支援に取り組もう！！

原発事故災害は「フクシマ」で最後に！

私たちはチェルノブイリ支援を通じて「繰り返さないで！チェルノブイリ」と、「救援関西」の発足以来20年間、日本の原発の危険性も訴えてきました。そしてそのメッセージを若い世代の人々にも伝えたいと、ベラルーシから若いゲスト二人、エレーナさん、カーチャさんを迎えての「25周年交流企画」を準備していました。ところが、3月11日、東日本大震災と福島第一原発重大事故が起きてしまいました。

福島原発周辺から緊急避難する人々の姿に、25年前のチェルノブイリ原発事故の翌日にプリピャチの町から、取る物もとりあえず避難させられた人々の姿が思い出されました。また、福島原発で事態の悪化を食い止めるため、若い消防士や労働者が、高レベル放射線に曝されながら懸命の作業を続ける姿に、チェルノブイリ事故直後、消火に駆けつけた消防士、旧ソ連各地から事故処理のために投入された若い兵士や労働者の姿が重なっ



て見えました。言われもなく被曝させられている人々、故郷を後に避難しなければならなかった人々、被災者の方々のこれからの苦労を思い、チェルノブイリのヒバクシャの経験と重ねて、深い悲しみを感しました。

三ヶ月近く経った今も福島原発事故はまだ収束していません。チェルノブイリ事故の10分の1（セシウム137だけで比較すると広島型原発の50-100発分）に相当する大量の放射性物質がすでに放出されたと報告されています。汚染は原発周辺だけでなく、風と雨によって30km圏を越える広範な地域に広がり、さらに拡散して首都圏を含む広範な地域に流れてゆきました。大気と海へ放射能放出が続き、汚染は日本国内にとどまりません。「フクシマ」は「チェルノブイリ」に並ぶ、人類の歴史に残る重大事故となってしまったのです。

これまで、チェルノブイリ事故の汚染と被害に苦しんできたベラルーシの友人たちは、日本の私たちのことを心配して、すぐにメッセージを送ってくれました。4月末の来日に向けて、日本での報告の準備を進めて下さっていたクラスノポリエのエレーナさん、カーチャさんは、来日するかどうかずいぶんと悩まれましたが、事故の翌週に、小児科医のベーラさんやご家族の皆さんと相談した結果、来日を断念されました。汚染地で25年間も住み続けてきた彼女たちに、事故収束のメドのたたない原発を抱えた日本に来て頂くというのは…残念ですが、やはり「無理なお願い」です。

私たちは、「チェルノブイリ25年」に福島原発事故に直面し、「チェルノブイリを繰り返さないで！」と訴えてきたのに、このような事故が日本で起こるのを防ぐことができなかったことの意味を考え、今度こそ、フクシマを最後に「核の被害」を止めねば…という思いで「25周年企画」にも取り組みました。原発推進のエネルギー政策をやめ、再生可能なエネルギーへの速やかな転換をはかることこそが、チェルノブイリ原発事故から、またフクシマ原発事故から私たちが学ぶべき教訓です。これまでチェルノブイリ支援・交流に取り組んできた経験を活かし、大震災の被害に加え、放射能汚染による被曝の危険に日々曝されている福島の人々と繋がって、原発被災者の方々の健康と命、人権を守る取り組みを広げましょう。



カンパ・会費の納入ありがとうございました！！

2011.4.5~6.3

円居愛一郎 円居敬子 山下春美 大田美智子 山崎知行 上岩出診療所 岡村達郎 植田成人
佐藤大介 北川れん子 向井千晃 碧海宏 大崎千尋 太田垣みさ子 奥平純子 高矢代志江 野田暢子
福井真理 即得寺 梅原桂子 松田高志 大久保利子 杉村ルミ子 根生恵子 谷岡文香 松本豊子
小林夏江 磯山靈秀 金山次代 長谷川育子 松川直子 泉迪子 小山師人 井上和歌 定森和枝
木村英子 山田耕作 山田五十鈴 京都原発研究会 振津かつみ 松下照幸 木下桂子 鎌橋照子
村上玲子 和田満穂 遠山薫 城晶子 鹿間桂子 田中章子 東野セツ 久保きよ子 山本英子 田島満
田島小幸 堂元ふく子

(順不同・敬称略／「25周年企画」賛同カンパも含む)

<チェルノブイリ25周年企画特集>

【創作バレエ公演】

チェルノブイリ25年によせて

「平和への種ともなれば」公演

長澤 由美

2011年4月2日、尼崎市のピッコロシアターで、ダンスコアポシブルによるバレエを中心に、チェルノブイリ原発事故25周年のプレイベントを行いました。

このテーマをどうやってバレエに？・・・信じられない舞台でした。

「広島・長崎からチェルノブイリへ」、「多くのヒバクシャの苦しみを繰り返さないでほしい」という、チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西のテーマが、バレエ、歌、音楽の舞台として実現・表現されました。

《圧巻の群舞》

戦争と原爆投下。圧巻の群舞の迫力は、心臓をわしつかみされるようでした。戦争や原爆を、人間の体と動きで表すと言うことはこういうことか？と、今は思いますが、その時は何も考えられず、引き込まれてしまいました。つづいて、栗原貞子の詩「生ましめんかな」。オペレッタ歌手森田留美さんの弾き語りと小谷ちず子さんのバレエのコラボレーション。勝手ですが、二人が、理不尽な場面でも最後の最後まで力を尽くす「母」に重なりました。

チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西代表の山科和子さん（長崎被爆者）の体験「平和への種ともなれば」は、「赤とんぼ」の曲とともに失われた家族への思いが、福原幸さんのソロダンスで切なく表現されました。小柄な山科さん、いつも明るい山科さん、89歳の今も語り部として前向きな山科さんの心の底の痛みを、少しだけのぞいたように思いました。

《折り鶴の歌》

モンゴルの作曲家の手によるといわれる、広島の少女の折り鶴の歌。この心を引きつけるメロデーが宮越昌子さんの歌と藻川祥江さんのバイオリンと共に幻想的なバレエになりました。この曲は、目に見えない、正体のつかめないヒバクと病氣に対して、内への祈りを込めるとともに、外へ世界中へのメッセージとして響きました。

《チェルノブイリの祈り》

躍動感あふれるバラライカの音、ロシアの子どもたちの踊り、美しい自然や人々の暮らしやうき



うきする子どもの笑い声が聞こえてくるような場面から一転。時間が止まったような不気味な静止と黒のダンサーの踊り。次々倒れる子どもたち。お母さんたちの叫び……。バレエですから声は聞こえなかったはずですが、叫び声を聞いたように感じました。

《ヨモギの地の楓・私たちみんなの痛み》

後半は、スベトラーナ・アレクシエービチさんの「チェルノブイリの祈り」の一節の朗読から始まり、交流しているベラルーシの子どもたちの詩に入り、エピローグ・ラストの群舞へと続きます。

「大地からチェルノブイリの痕跡をなくしてしまいたい。波紋が水面に消えていくように傷ついた心も消えてしまえばいいのに……」「放射能は大気に充満し、私達が触るものすべてに、りんご、いちご、コップの水に……」「人々は庭の作物を口にすることを恐れるようになった……」

「チェルノブイリの傷から引き離すため異郷の地に救い出されても、(心が) 大きな力に突き動かされて、かけがえのない故郷へ戻っていきたくらう……」



現実の子どもたちの詩(言葉)が、現在進行形の福島の子どもの声となんと重なることでしょうか?一番信頼できるはずの身近な自然が汚染されていくことへの戸惑い、目に見えない放射能の怖さ、将来への不安、ふるさとへの思い、家族とふるさとの人々へ

の思い。子ども達は、こんなに見、感じ、考えている。バレエのラストでは、厳しい現状でも逃げずに立ち向かう人々の「希望」をかすかに最後の群舞で感じました。

《ヒロシマ・ナガサキ・チェルノブイリ・フクシマを繰り返さないで!》

チケット販売数で332人。プラス当日チケットなしで現金入場された方も入れて、約360人のほぼ満席の入場でした。また、東日本大震災と福島の被害にむけてカンパは10万2131円集まりました。退場時には多くの方から声を掛けて頂きました。いままでチェルノブイリや核や原発のことに関わったことのない方も含めて幅広く、舞台からいろいろなことを感じていただけた、貴重な機会となりました。危機的な状況が持続している福島も含め、目を背けず、本当のことを知ることから始めなければなりません。ヒロシマ・ナガサキ・チェルノブイリ・フクシマを繰り返さないで!

「平和への種ともなれば」公演を終えて

小林美香（日本ナレーション演技研修所 研修科）

チェルノブイリの事故の事は、聞いたことはありましたが、生まれる前の遠い所の出来事でした。

しかし、今回劇団から朗読のお話があり、アレクシエービチさんのチェルノブイリの祈りの一節を読みました。チェルノブイリの事故が人類、そしてひとりひとりの人間の運命をどのように変えたか、を思いました。

なんとというタイミングでしょう。本番に向けて準備していた時に、突如として起きた東日本大震災。本当に公演をしていいものか？出演者・スタッフの皆が、迷い、悩んでいました。しかし、皆の心の奥底には震災前よりも強い思いがありました。私も気を引き締め直し、本番に臨みました。舞台を作り上げた全員の思いは、しっかりと観客に届いたはずです。



公演を見終わって・・・(感想)

*印象に残っているのは、二人の朗読の被曝したご主人の様子シーンです。話しを聞いているだけに奥様の心の葛藤が伝わって来ました。まるで目の前で看病しているように感じました。怖いです！こんな惨状が繰り返し起こらない事を願います。

*何が起きたか、分からない、そして不安、悲しみ、怒り、等初めて観た創作ダンス、観ていて伝わってきました。

*地震の映像と重なって切なく胸に迫る物がありました。現実的で悲しい気持ちにもなりました。或上手く言えないですがお汲み取りくださいませ。

*チェルノブイリの恐怖をダンスと音楽で、目と耳に訴え掛けたのは、活字とは違うインパクトがあった。ダンスをした子供達を通して回りの人々が、原発について考える良い機会だったと思います。

*白い衣装とトウシューズの軽やかなステップが、ずっと、心に残っています。素晴らしい芸術観賞と原子力の否環境性・否人間性・否生物性...二つの想いを同時に表現するには、並々ならない苦勞と準備があったと思います。

最後に振津さんが「原発を止めることが出来ていたなら、今回の事故もなかったのに...」と言う意味の挨拶をされました。20年以上、原発反対の活動、チェルノブイリへの支援・交流を続けながら、原発停止に至らなかった悔しさが、ずんと胸に伝わって来ました。振津さん、久保さん、そして、活動を継続してきて下さった方々に心より敬意を表します。

*丁度震災の後で目に入って来るものが 暗いものばかりでリアルに演じられて目をつぶる場面もありました。色々考える事の多い私は和む様なものの方がいいわと思いました。

*最初は暗い話しと思ったけど見てるうちに、毎日福島原発のニュースを見るので、それとだぶって怖くなったわ。これから、原発はどうなるんかね？

*バレエで表現される原発の様子を見てあらためて原発の怖さを知りました。

【子ども達の絵・写真展】

「チェルノブイリの子どもたちの絵・写真展」に寄せて

寺岡 文

「来年春、チェルノブイリ 25 周年にあわせて子どもたちの絵を展示するから手伝ってくれませんか」と、昨年の秋頃だったか、猪又さんから最初のメールをいただきました。展示方法などどうしたらいいかわからない、と、とても不安そうな猪又さん。一度お会いしてと、近所の公園で詳細をお聞きしたのがもう半年も前のこと。紅葉真っ盛りな時期で、辺りの樹々も美しく、その数ヶ月後、日本でまさかチェルノブイリのような大事故が起こることになるなんて、そのときは思いも寄りませんでした。(もちろん、これを読んでいる方たちは原発の事故はいつ起こってもおかしくない！と行動されていた方が多数だと思いますが…)

私はというと、そうになったら大変だ、と思いながらも、皆さんほども行動に移せていませんでした。

それから、具体的に展示準備を始めたのは3月あたまでした。ギャラリーの下見に行き、展示会場をチェックしながらも、今では「チェルノブイリ」という言葉さえ知らない人もいるし、、知っていても皆あまり興味を示してくれない、、いくら良い物を展示してもあまり来て貰えないのだろうな、、というのがそのときの正直な思いでした。

そして、そのわずか3日後。

3月11日。

大震災は起こってしまいました。津波に地震。そして福島原発の事故。チェルノブイリの大惨事から25年たった日本で……

一番そんな事故を起こしてはいけない国が起こってしまいました。広島、長崎でヒバクシ、そして今度は福島で…

この展示は、日本に住む私たちにとって、「遠い国の昔の話」ではなく、今現在直面している現実問題となってしまったのです。(もちろん日本だけの問題ではなく、地球規模の問題ですが…)

最初予定していなかった福島原発の写真も展示に加わることになりました。

今まで無関心だった人もチラシに興味を持って受け取ってくれるようになりました。以前だったら、こういう話も(敬遠されて)出来なかった人たちと、今では話が出来ます。

原発事故が起こっていいことなんて一つもないけれど、これがきっかけとなり、

世の中から原発がなくなり、クリーンエネルギーに転換することができれば、せめてもの、でしょうか。それでも犠牲はどれだけ大きいのか。そして、これを書いている時点(2011年5月23日)



でも事故は収拾していない、、、

少し展示の話からそれてしまいました。

実際、子どもたちの絵や写真などを見せてもらったのは、震災4日後の3月15日でした。

毎日、福島原発の事故をニュースで見て絶望的な気持ちになっていました。

外出する気にもなれなかったけれど、重苦しい気持ちで絵を置いてある家まで行きました。

子どもたちの絵からは、画材道具も少ないであろう、日本の子たちのように贅沢な絵の具や紙がないのうかがえました。色も少ないのです。内容も明るく楽しいものではありません。展示としては正直地味です。でもこれが、被災地で生きる子どもたちの現実なのです。他に写真や資料、昨年50歳で亡くなられたターニャさんの絵もあります。

彼女自身の自画像が悲しげに訴えているようでした。

点数が多いので、絵の最終選択や細かいところは当日展示会場で考えることにしました。

そして搬入の日集まったのは振津さん、猪又さん、田中さん、そして私でした。

展示物は子どもの絵だけではないので、まずどのように分けるか考えました。

救援関西のコーナー、子どもたちの絵のコーナー、毎日新聞の記者の方が撮られた現地の写真のコーナー、などなど、いくつものコーナーに分かれます。

見やすいように、興味を持ってもらえるように展示しないといけないですが、それよりも、一番大変だったのが、壁に画鋏で留める作業でした。とにかく、壁が固くて針が入らない！！！！

思わぬ力仕事に皆へとへとでした。。（粘土のようなもので貼ったりもしましたが）

皆さま、本当にご苦労さまでした。。

そうして何とか無事に準備を終え、7日から展示が始まりました。

多くの方が来場してくれたと思います。福島原発事故の影響が大きかったのかもしれませんが、もう二度と、これ以上悲しい展示を増やすことのない世の中になりますように。

原発事故は福島で最後にして欲しい。

そんな世の中にしていかないといけないと、心新たに思います。



熱心に！ 真剣に！

「チェルノブイリの子ども達の絵・写真展」に多くの方が来場

猪又 雅子

4月7日から12日迄大阪市立生涯学習センターで、チェルノブイリ25周年企画の第2弾として「チェルノブイリの子ども達の絵・写真展」に取り組みました。絵・写真を通して、チェルノブイリ事故が何をもたらしたのかを知り、思い起こし、そして考えてみたいとの思いでした。今迄交流・支援を重ねる中で託された、被災地の子ども達が描いた絵の数々を展示しました。加えてターニャさんの絵も展示しました。「移住者の会」の先



頭に立って頑張ってもらえ、自らもヒバクシャであるターニャさんは、昨年夏、脳腫瘍で倒れました。ターニャさんの最後のメッセージも、是非展示したかった絵の一部です。又、被災地の方々との交流の様子やベラルーシの美しい自然の写真も展示しました。それに毎日新聞社の大島記者から事故後15年目にチェルノブイリ現地を訪れ「小さな核戦争」と呼ばれた現場の貴重な写真もお借りしました。石棺、観覧車、廃屋、野ざらしのままの事故処理にあたった飛行機・戦車などです。そして、まさにその時に、福島第一原発で重大事故が起きてしまいました。若狭ネットの久保さんをお願いして、急遽福島原発の惨状の写真も加えました。水素爆発で原子炉建家上部が吹き飛び、鉄骨が剥き出しになって無残な姿を晒す原発。白煙の上がる3号炉。白い防護服で高線量のヒバクをしながら電源復旧にあたる作業員。事故現場の恐ろしさ・生々しさを伝えています。

今回の展示には寺岡さんに全面的に協力してもらいました。協力の承諾を貰った時は心底ホッとしました。そして会場の準備が終わった時、絵の配置など、素敵な（重い内容なので不謹慎と思いますが、敢えてこの言葉を使わせて頂きます）展示が出来たと疲れも和らぎました。寺岡さんの力があつたればこそでした。展示した絵や写真は117枚にもぼりました。

今回は新聞やTVで取り上げられ、福島原発事故という衝撃とあまりのタイミングに、大阪はもとより、神戸・奈良・京都・和歌山など関西一円からも見に来てくださいました。熱心に、真剣に見ておられました。そして、アンケートにも沢山の意見・感想を寄せてくださいました。チェルノブイリと同様なことが福島で繰り返されてしまった衝撃に、多くの方は、原発は止めて再生可能エネルギーへ向かうべきとの思いを強くしたようでした。

チェルノブイリ子ども達の絵・写真展アンケート（一部抜粋）

*展示を見ての感想・意見

- ・今回の福島での原発事故がきっかけで、チェルノブイリのことを知りました。私が生まれる前の事とはいえ、戦争での広島や長崎の原爆についてと同じように、チェルノブイリについてももっと広く学ぶべきだと思い、

今回足を運びました。何の罪もない住民が移住を余義なくされ、放射線の被害に長い間苦しんでいる様子が痛々しく、気の毒に思います。写真に写っている子ども達は今どうしているのか・・・ふと考えました。

- ・大変強いショックをうけました。原発は即時ストップにもっていくべき。
- ・子ども達の絵・写真の素朴さがかえって強く訴えます。資料もとてもわかり易く勉強になりました。
- ・原発が無かったら村がどんなにか美しく平和であったでしょう。そしてみんなが倅せで平凡な日常があった筈です。何もかも破壊されてしまった。チェルノブイリの人たちの悲しさが痛い程伝わってきました。
- ・今まであまり深く考えた事がない問題であったので、今回日本でもこういう事態になり、改めてもっとしっかりと自分の考えを持っていくべきだと思いました。子どもたちの未来が明るいものでありますように・・・。
- ・ターニャさんの絵に胸が打たれました。どんなにか悔しい思いだったかと。子どもたちの絵と笑顔が今の福島と重なります。
- ・いままでは遠い国の話だと思っていましたが、今回の福島原発の事故により、今まで何故原発について考えなかったのかと反省します。

明るい未来のため、原発を減らし、世界の人がもっと環境によく安全なエネルギーについて考えるべきだと



思います。

- ・日本も大変な事になっていると痛感します。便利が良すぎても犠牲が多くなってくるので、少しの不便は我慢しないといけないと思った。
- ・やっぱり原発は絶対だめ！！廃止に立ち上がる！
- ・一度事故を起こせば、二度と取り返しがつかない事を痛感させられました。
- ・現在進行形の現実と、チェルノブイリの子ども達の絵や、チェルノブイリ現地の写真が重なり合って、迫ってくる思いです。「まさか」が起こった今、現実を見据え

て本当に「核と人類は共存できない」という事を発信しつづければと強く思います。

- ・次世代まで影響する放射能汚染を絶対に繰り返さない様。
- ・チェルノブイリと福島の写真が重なって見える。又、子ども達が大変な目にあう。心が痛む。
- ・何も知らないのが恥ずかしく、来ました。勉強しました。
- ・チェルノブイリを繰り返しては絶対いけないとこれまで運動してきたのに、福島で大事故が起こり今なお収束していないこと、子供たちが被曝した恐れがあること、大気中や海にも汚染が広がり、故郷に二度と戻れないかもしれないこと。地震国に54基も建てさせてしまったこと。タダタダこれまでの政治のありよう、今の政治のありよう、今なお推進の姿勢を変えない人達。今年に原発を止めるための大切な一年になると思う。
- ・50才で亡くなられたターニャさんの「日本の皆様が私たちのように『強制移住』させられなくてすみませうように」という言葉を裏切るような事になってしまって、本当に何ということかと思わざるをえません。
- ・テレビでこの写真展を見て、是非見てみたいと思い来て、あまり今まで知ることのなかった世界を知る事ができました。自身にも子どもがいることもあり、胸が痛くなる絵や写真でした。
- ・高汚染地域で移住を拒んで生活している方々の写真を見て驚きました。原発の恐ろしさを改めて感じました。
- ・他人事のように思っていたが、福島原発の事故で身近に感じた。

4・16原発いらん！関西行動

－「集まろう！中之島 歩こう！御堂筋」－

に参加し 元気をもらいました

久保 きよ子

「繰り返さないでチェルノブイリ」を合い言葉に これまで「原発を止めよう！ヒバクシャをこれ以上増やさないで！」の運動を続けてきた私たち。

しかし、2011年3月11日 あってはならない、起こってはならない原発事故が起こってしま

いました。福島第一原発重大事故は、フクシマ事故として世界へ発信されたのです。2ヶ月経ってもいまだに事故の収束の目処は立っていません。

事故を収束させようと必死で働く作業員は、多量の被ばくを強いられ続けています。周辺住民は、避難させられ、放射能汚染地は、30キロ以遠でも拡がり続けています。

原発を推進してきた者への怒り、自分たちの心がいなさ、無力感を味わいながらも、それでも、原発を止めようという熱い熱い

思いをぶつけないという憤りを持って、4月16日、中之島公園に参集しました。集会が始まる時刻になると、同じ思いを持つ人たちが続々と集まり、広場は満杯となり、歩道を埋め尽くすほどの集まりとなりました。主催者発表で、参加者は3500人でした。

私たちのグループに何人ぐらい来て下さるのかと、心配をしていました。ベラルーシまでたくさんの救援物資を運んで下さったAさん、運動に参加されたときは大学生だったMさん、親子でベラルーシ訪問をされたBさんや救援活動していたNさん、訪問報告を子どもたちにしたときにお世話になった中学校の先生方、そして、ニュース会員の方々と、次々と参加されました。

私たちの横断幕には、「地球はとっても壊れやすいの だから大人たちには、わたしたちの星をおもちゃにしないで！」と、書きました。これは、2001年に来日されたターニャさん（美術の先生）の言葉です。ターニャさんが、日本の子どもたちに「原発を止めていくため」に送ったメッセージでした。この言葉をしっかりと刻んでおきたいという思いで横断幕をつくりました。実は愛するターニャさんは、もういないのです。もうおわかりだと思いますが、チェルノブイリ原発事故で、疎開、移住を余儀なくされ、事故から24年経ってから脳腫瘍で亡くられたのです。昨年の夏の出来事でした。彼女は、



「私のようなヒバクシャをこれ以上増やさないで」という思いを強く持っておられた方だったので、

やさしくほほえむ彼女の姿を忍びながら、私たちが、その思いをしっかりと受け継ぎ、次の世代へバトンタッチをしなければと思います。その気持ちを強く強く心に秘め、淀屋橋から、本町、心齋橋、難波まで、「原発を止めよう！」と、大きな声で訴えました。

疲れたけど、充実感あるパレードとなりました。

第2弾は、6月11日です。またがんばりましょう！

【チェルノブイリ原発事故25周年の集い】

チェルノブイリ事故25周年の集い〜チェルノブイリとフクシマを結んで開催 核の被害はフクシマで最後に！原発事故被災者支援に取り組もう！

振津かつみ

4月24日、大阪梅田の「毎日インテシオ」において「救援関西」主催の「チェルノブイリ原発事故25周年」の集いが開催されました。クラスノポリエのエレーナさんとカーチャさんを迎えての交流・講演会となるはずだったこの集いは、福島原発事故の経緯と現状をふまえ、私たちが今、何をしなければならないかを話し合う「集い」となりました。

冒頭に事務局の振津が「基調報告」を行い、「チェルノブイリとフクシマを結んで、フクシマ原発事故被災者支援の輪をひろげよう」「核の被害はフクシマで最後に」「原発を止めて再生可能なエネルギー政策の推進を」と呼びかけました。引き続き、「若狭連帯行動ネットワーク」の久保良夫さんが「福島原発事故の経緯と現状」を報告し、「地震国日本で原発は建ててはならない。原発の停止から廃棄へ！」と力強くアピールしました。そして「ヒバク反対キャンペーン」の建部さんから「事故による放射能汚染とヒバクの現状」について報告があり、これまでに公表されたデータを解析し、チェルノブイリ原発事故の際の10分の1に相当する放射性セシウムがすでに放出されたと推定されること、経時的に風向きが変わる中で、それぞれの原発の爆発にともなう「放射能雲」が次第に原発周辺から各方向へ広がっていった様子、汚染地域での深刻なヒバクの実態が説明されました。また、忙しい中を「集い」に参加して下さった、大阪選出の服部良一衆議院議員（社民党）は、原発から20~30kmで「屋内退避指示」の出た南相馬市を、大地震の一週間後に救援輸送車で訪問したことなど話され「ヒロシマ、ナガサキ、チェルノブイリの悲劇を再び思い起こし、福島原発事故の現実を直視して原子力に頼らないエネルギー政策への転換を急ぐべき」と訴えられました。

次に、クラスノポリエの小児科医ベーラさんからのレポートが紹介されました。レポートでは、「クラスノポリエでは、近年、子どもたちの一般疾病の発病率がやや増加。貧血の罹患率が高く、扁桃の慢性疾患、泌尿器疾患、先天的発育障害が増加。大人でも疾病率、死亡率がやや増加し、寿命が低下している。」など、長期にわたる汚染と被曝に、地域経済の低迷に伴う生活悪化が加わり、全体として被災地住民の健康悪化が続いている25年目のチェルノブイリ被災地の様子が報告され

ています（次号に掲載予定）。また、4月半ばに福島現地を訪問した振津は、「飯舘村など『計画的避難区域』に指定された地区だけでなく、福島市、郡山市など、福島県の広い範囲で『放射線管理区域』に相当するレベルの空間線量率が測定された。ヒバクを低減するための具体策と、長期にわたる人々の健康管理と補償を行うために国の責任で『健康手帳』を発行させるなどの対策が急がれる。」と報告しました。



る。」と報告しました。

集会には、高校生など若い人々から年配の方々まで、70名余りの参加があり、質問や議論が活発に行われました。最後に4月26日に関電本社に提出する、「関電の原発を止めるよう」求める関西電力への申し入れ書案を参加者全員で確認しました。

25周年の集い／基調報告

チェルノブイリ原発事故25周年を迎えて

～チェルノブイリ25周年に、福島原発事故による放射能災害に直面し～

**Fukushima原発事故被災者支援の輪をひろげよう！
核の被害を繰り返させない！
ヒバク被害のない世界をめざし進んでゆこう！**

福島原発事故～チェルノブイリ原発事故と並ぶ重大事故

3月11日、東北・関東地方を大地震が襲い、引き続き押し寄せた大津波は、東北地方沿岸を広範囲にわたり、街や村、人々とその暮らしのすべてを次々に飲み込んでゆきました。この戦後最大の自然災害に、福島第一原子力発電所の破壊と放射能放出という人災、重大事故による原子力災害が加わったのです。私たちは、地震、津波によって亡くなられた方々に深い哀悼の意を表し、被災された方々に心からお見舞い申し上げます。

福島第一原発では、放射能を大気と海にまき散らし、環境を汚染し、人々を被曝させながら、原子炉のメルトダウンや使用済み核燃料損傷の進行などによる、さらなる大量の放射能放出の危険性を抱えた危機的状態が続いています。大量の放射能放出という最悪の事態をなんとか食い止めようと、若い消防士、自衛隊員、そして多くの労働者が、高レベルの放射線に曝されながら、懸命の作業を続けています。私たちには、その姿が、チェルノブイリ事故直後に消火のために駆けつけた消防士、旧ソ連各地から事故処理のために投入された若い兵士や労働者の姿と重なって見えてきます。

大震災の翌日の3月12日、1号炉の爆発後、放射能放出が続く中で20キロ圏内の住民の避難指

示が出されました。震災被害だけなら避難する必要もなかった地域での町ごとの避難、さらに避難所を点々とし、いつもどれるかわからない中での、被曝への不安…。震災によって、道路が寸断されガソリン不足などのため、原発事故による避難指示が出されても避難そのものが容易ではありませんでした。原発周辺の避難地域では、移動の難しい老人や病人が残され、その家族、介護者、医療従事者が最後まで留まらざるを得ませんでした。病院からの移動中や避難先で患者さんが亡くなる悲しい事態も起こりました。人々は、震災で行方不明になった家族の捜索すらできずに屋内退避を余儀なくされました。「屋内退避」地域への支援物資輸送の遅れなど、放射能汚染は震災支援をより困難にしました。そして今や周囲20km圏内は立ち入り禁止の「警戒区域」となってしまいました。

30キロ以遠でも、風向きや地形によっては非常に高い放射線レベルが測定され、また作物や水、土壌から高い濃度の汚染が測定されています。チェルノブイリ原発事故後の高汚染地域と同じほどの汚染が、原発の北西方向を中心に30キロ圏内を越える地域にも広がり、「計画的避難」が設定されました。そして、人口29万人の福島市をはじめ、福島県下のいくつかの市町村にも、「放射線管理区域」（法令では外部被曝線量が3ヶ月で1.3mSvに達する区域）に相当する広大な汚染地域ができてしまっています。そして放射性物質は風にのり、拡散しながら首都圏を含むさらに広範な地域に広がっています。原発周辺の海水では国の基準値の4000倍を越える放射性ヨウ素が測定されたと報告されています。地域の人々の生活の糧であった、農業、漁業そのものが、震災・津波だけでなく、放射能汚染によっても脅かされているのです。

すでにチェルノブイリの10分の1もの放射能が放出され、今なお、福島原発は放射性物質を大気と海へ放出し続け、事態は収束していません。「フクシマ」は「チェルノブイリ」に並ぶ、人類の歴史に残る重大事故となってしまいました。「フクシマ」は原発重大事故がもたらす核汚染とヒバクの持続する深刻な脅威を、改めて全世界に示しています

チェルノブイリ支援と阪神大震災の経験を活かしたフクシマ原発被災者支援を

私たちはこれまで20年間にわたり、チェルノブイリ原発事故の被災者への支援と交流の活動に取れほどの大きな「痛み」を与えたことか、また人々の生活が事故前後で別世界のように変わってしまったことを目の当たりにしてきました。チェルノブイリのヒバクシャの「痛み」を受け止めながら支援を続けてきた私たちは、今、大地震と津波の被害に加え、福島原発から放出される放射能（放射性物質）の危険に日々曝されている人々のことを思い、同じ「痛み」を感じています。また15年前の阪神大震災の際には、私たち「救援関西」のメンバーの多くが被災し、震災後の様々な困難を自ら体験しました。そのような私たちだからこそできる支援があるのではないかと、「チェルノブイリ原発事故25周年」の今、チェルノブイリ支援とともに震災被災地支援に、とりわけ福島原発被災者支援に、全国の皆さんとともに取り組みたいと思います。

私たちが救援・交流を続けているベラルーシのチェルノブイリ被災地の友人たちからも日本の私たち、被災地の方々を案じて、お見舞いと連帯のメッセージが届いています。また、米国やオースト

ラリアでウラン採掘の被害を受けている先住民の友人たち、イラクで劣化ウラン兵器の被害者治療に取り組むバスラの医師たちなども、次々に日本の被災地の人々のことを思い、連帯のメッセージを寄せてくれています。

原発・核燃料サイクル推進をやめさせ

再生可能エネルギーへの速やかな転換を求めよう

このような事態に至っても、原発推進の政策を根本的に見直そうとしない、政府、電力会社に、私たちは強い憤りを感じます。政府は全国の原発の速やかな停止指示を直ちに出すべきです。福島原発で起こった事態は、日本中のどこの原発でも起こりうること、「想定外」ではすまされないことなのです。そして、原発推進のエネルギー政策をやめ、再生可能なエネルギーへの速やかな転換をはかるべきです。これこそが、チェルノブイリ原発事故から、またフクシマ原発事故から私たちが学ぶべき教訓です。

政府と電力会社は、このような事態を招いた責任を認め、謝罪した上で、国内外の技術的、人的、物的支援を総結集し、作業員の被曝を最小限に抑えるよう細心の注意を払いつつ、事態の速やかな収束をめざす具体的対策を全力で講じるべきです。

政府は、汚染した作物に対する流通規制だけでなく、放射能汚染によって被害を受けた農家等に、十分な補償と支援を行うべきです。政府は、原発周辺における各種の放射性物質の汚染調査を詳細に行い、そのデータを全て国民に公表すべきです。そして、人々の被曝を最小限に抑えるための諸方策を早期に講じるべきです。

そのような事態の中でも、政府や電力会社、マスコミは、福島原発からの放射能によって放射線レベルの上がっているどの地域の空間線量についても、あるいは報告されている汚染食品や水の摂取によるヒバクについても、「健康に直ちに影響はないレベル」と繰り返しています。しかしこれは、何年も後に発症する可能性のあるがんや白血病などの後障害を全く無視した発言です。福島県では、行政が率先して、「専門家」を招き、放射能汚染とヒバクを過小評価するようなキャンペーンを組織的に行っています。すでに子どもも含む、多くの一般市民が、日常的にヒバクさせられる汚染が生じているにもかかわらず、その危険性と責任を認めず、被災者を切り捨てようとするのを許してはなりません。

政府が今回の福島原発事故発生後、原発での作業員や住民の「被曝防護」、避難・屋内退避、汚染食品管理などの「介入」の拠り所になっている「国際放射線防護委員会」(ICRP)の「緊急時被曝の勧告」は、チェルノブイリ事故後、その汚染と被曝の現状をそのまま追認する形で「基準緩和」されて設定されたものです。それは、チェルノブイリ規模の汚染が起きても、労働者と住民に被曝を押し付け、原発を動かし続けるための指針であり、私たちは容認することはできません。

これらの基準の緩和、ヒバクの押し付けに反対すると同時に、被災地域の人々、原発ヒバク労働者

と連帯し、国の責任による被災者の健康のフォロー、健康と生活の補償（「健康手帳」の発行など）の体制を求めてゆくことが大切です。

**チェルノブイリのヒバクシャをはじめ世界のヒバクシャと連帯し
フクシマを「核時代の終わりの始まりに」
引続き、チェルノブイリのヒバクシャ支援・交流を広げましょう**

これまで私たちは「繰り返さないで、チェルノブイリ！」と、訴え続けてきました。それにもかかわらず、重大事故を日本で許してしまい、チェルノブイリと同じような高汚染とヒバクに苦しむ多くの人々を、「ヒロシマ・ナガサキの核の悲惨」を経験した日本で生み出してしまったのです。そして今、チェルノブイリを上回る大量の放射能放出が、現実にかかるかもしれないという状況に立たされています。そして日本は、福島原発から今なお放出され続けている放射性物質によって、地球環境を汚染し、「核の直接的加害国」になってしまっています。私たちは、そのことの「意味」を自らに真剣に問わねばなりません。

世界のヒバクシャは、ヒバクによる苦しみを知り、それを引き起こした「核利用」を進めている「共通の敵」を知っているからこそ、連帯の思いを込めてメッセージを送ってくれているのだと思います。「チェルノブイリ25年」を迎える今、日本で「フクシマ」と向き合っている私たちは、チェルノブイリのヒバクシャをはじめ、世界のヒバクシャとの連帯をよりいっそう強めながら、フクシマ原発被災者への支援にも取り組みたいと思います。また、国内外の運動の力を結集し、今度こそヒバク被害のない世界の実現をめざし、日本の原発推進・核燃料サイクル推進をやめさせ、「フクシマ」を「核時代の終わりの始まり」にしてゆけるよう全力で取り組みましょう。

25年を迎えたチェルノブイリ原発事故の被災地では、今も放射能汚染が続いています。チェルノブイリの被災者の健康被害の全容は、まだこれから一層顕在化することが予想されます。また、チェルノブイリ事故のもたらした生態系全体への影響なども、今後さらに解明されねばなりません。私たち「救援関西」は、今後も、チェルノブイリのヒバクシャへの支援と交流に取り組みます。また、今年も、被災地の子どもたちの保養キャンペーンや現地代表訪問に取組みます。それらの取組みの中で、フクシマ原発被災者とチェルノブイリのヒバクシャとの交流や連帯した取組みもめざしてゆきたいと思います。

「チェルノブイリ原発事故25周年」に、広島・長崎のヒバクの苦しみを体験した日本で、福島原発の放射能災害に直面している今、私たちは、改めて呼びかけます。

**広島・長崎、チェルノブイリ、フクシマを結んで、
世界のすべてのヒバクシャと手を結んで、
ヒバク被害のない世界をめざし前進しましょう！**





「直ちに健康に影響のないレベル」って…？！

福島原発事故後、汚染が広がる中で、政府は、どんな汚染やヒバクについても「直ちに健康に影響はないレベル」と繰り返しています。また、福島県では行政が率先して「専門家」を招き、「100 ミシーベルトまでの被曝は心配ない」などという情報を市民に拡げようとしてきました。

「直ちに影響がない」というのは、放射線被曝による「急性症状が出ない」ということであって、何年も後に発症する可能性のあるがんや白血病などの後障害を被害として認めようとしないための表現です。科学的には、「どんな低い線量でも、その線量に応じた健康影響（晩発影響）が起こる可能性がある」というのが正しいのです。

福島県では、原発周辺だけでなく、チェルノブイリ原発事故後の高汚染地域と同じほどの汚染が、原発の北西方向を中心に30キロ圏内を越える地域にも広がり、「計画的避難区域」が設定されました。そして人口29万人の福島市をはじめ、県下の広範な地域が、チェルノブイリ事故の際にも「汚染地域」とされたレベル（セシウム137で「37,000 ベクレル/m²」以上の汚染）に汚染されています。これは、日本の法律でも「放射線管理区域」に指定されている表面汚染レベルです。このように、すでに子どもを含む多くの一般市民が、日常的にヒバクさせられる汚染が生じているにもかかわらず、「直ちに…」と繰り返し、被曝の危険性を認めず、被曝低減のための施策を遅らせることを許してはなりません。

文部科学省が子供たちに、「通常運転時」の原発労働者の「被曝限度」にも相当するような、年20 ミシーベルトの被曝を容認する「福島県内の学校等の校舎・校庭等の利用判断における暫定的考え方について」の基準（屋外で3.8 マイクロシーベルト/時）を出したことは言語道断です。とりわけ、小児や胎児のように成長の著しい個体は放射線に対する感受性が成人より高いというのは科学者なら誰もが認めるところです。福島現地では、「子どもたちをヒバクから守ろう」と人々が立ち上がり、自治体やボランティアの手で学校や幼稚園の庭の表土の除去が始まりました。その現状を追認する形で、文部科学大臣は5月27日にやっと「今年度は、当面、年間1 ミシーベルト以下をめざす」と発表しましたが、依然として「年間20 ミシーベルトの基準」を撤回していません。政府は、事故前の公衆の被曝限度（1 ミシーベルト/年）を尊重して「基準」そのものを大幅に引き下げるべきです。そして汚染された校庭、公園の表土の取り替えなどは、国が「費用を負担する」だけでなく、責任を持って作業も行うべきです。

私たちが支援しているベラルーシのチェルノブイリ「汚染地域」では、毎年、住民の検診、ホールボディカウンターを用いた体内のセシウム量の測定などを行っています。同じように福島でも、すでに避難した人々と「汚染地域」に住んでいる原発被災住民全員に、国の責任で検診などの長期の健康管理を行い、疾病の早期発見と医療を行う体制を整えることが必要です。そのために「原発被災者補償法」を制定し、広島・長崎の原爆被爆者と同じように「健康手帳」を発行させることが必要だと考えます。

マスクの着用や屋外での活動の制限など、「汚染地域」の子どもたちの被曝を軽減するための日々の対策が必要ですが、一方で子どもたちの精神的ストレスの増加も危惧されます。チェルノブイリの汚染地の子どもたちに対して私たちが行ってきた経験からも、今、全国で支援者の方々が取り組みを始めている「汚染のない地域での短期保養」を、夏期休暇などを利用して行うことは子どもたちの心身の健康にとっても大切なことだと思います。

広島・長崎の被爆者の経験、チェルノブイリの被災者経験や教訓を、ほんとうの意味でフクシマの原発被災者への支援や対策にも、もっと活かすべきではないでしょうか。

4月24日の集会で 10分間アピールをしました

若狭ネット 久保

1986年4月26日 チェルノブイリ事故

それから25年経った3月11日 福島原発で深刻な重大事故が勃発しました。

この福島事故は、原発から放射性物質がまき散らかされ、大気・土地・海に汚染が広がり、生命・健康の破壊、子孫繁栄の危機など 改めて原発事故の深刻さを全世界に示したのです。

私からは、1 事故は、未だに収束していないこと。 2 地震国日本で、原発を建ててはならないという いましめ。 3 これからの闘いの方向 について、アピールしていきます。

1、事故は収束できていません。

原子炉の冷却システムは回復できず、いまだに一步間違えばもっともっと深刻な災害に陥る恐れがあります。炉心が吹っ飛び蒸気爆発が起これば、首都圏壊滅もあるのです。そして、放射能汚染は ますます深刻化してきています。放射能放出期間は長期化し、最悪の場合にはチェルノブイリ事故をも超えるおそれがあります。(私が小さいときには、核実験がおこなわれ、母親に「雨が体に当たらないように」と言われました)

(たとえば、これから、大きな余震が起こり冷却できない事態になり、崩壊熱で燃料が溶け出し、底に貯まった水に当たり、蒸気爆発がおこる)

原発を推進の宣伝で、「安全です。原発はペレット、被覆管、原子炉容器、格納容器、外部遮蔽壁の五重の壁になっている」とか、「止める、冷やす、閉じ込めるという万全の対策がある」とか、「異常の発生、異常の拡大や事故の発展の防止、放射性物質の放出防止 多重防護システムに」というのは、すべて大ウソだったのです。



2. 3月11日のM9.0の地震動は、耐震設計の基準となる地震動よりはるかに超えていました。

それだけでなく、4月7日の宮城県沖スラブ内余震(M7.4)では、強い鉛直地震動が女川原発を襲い、安全の目安になる基準地震動を超えました。また、4月11日の福島県浜通りの余震(M7.1)でも、福島第一原発1~3号炉の外部電源がすべて遮断され、50分間にわたり炉心への注水不能状態に陥ったのです。本震だけでなく、余震ですら、原発の耐震性を保証する基準をはるかに超える大地震が起きたのです。国の安全基準を一から見直さないと、危険な原発を誰も安全ですとは言えないところまできているのです。原発を止めるしかないのです。

大津波が起こることについても歴史的にも大津波が襲ったことは指摘されていました。電力は、「今後考慮する」と言いながら、まあこんなことは起こらないだろうと、すましてしまっていたのです。実際に大津波が起こってしまうと、「想定外だった」と言って、見苦しい言い逃れをしようとしているのです。あきれられるばかりです。

関西電力は、「今回の福島第一原発事故を、同じ原子力事業に携わるものとして、『決して起こし

てはならない重大な事故』であると大変重く受け止めております。」とか、「安全確保に万全を期すため、地震、津波に対する緊急安全対策を直ちに実施しております。」とか、「新たな知見が得られ次第、必要な安全対策について最優先で取り組んで参ります。」「原発は必要だ」と言い張り続けています。

私たちは、事故やトラブルが起こるたびに原発は安全だと繰り返す電力に、私たちの命を預けていていいのでしょうか。子どもや孫の命や健康を原発運転に捧げるわけにはいきません。

フクシマ事故から二週間も経った3月31日 これまで日本の原子力推進を担ってきた責任者たちが、① 状況はかなり深刻である、② 広範な放射能汚染の可能性を排除できない、③ 国内の知識・経験を総動員する必要があると、緊急事態に対処を求める「建言」を発表しました。これをもって、原発を推進してきた免罪符となるのでしょうか。

私たちは、事故を契機に訴えます。

- ・ 直下地震や近隣での大地震にも耐えられるといいつづけた関西電力は、反省し、謝罪する。
- ・ 今の耐震設計審査指針そのものの根本的な欠陥を認め、耐震性評価法の過小評価だったことを認める。
- ・ 若狭の原発で、地震による重大事故がいつ起きてもおかしくない。すべての原発を止め、耐震性評価と対策を根本からやり直し、耐震性なき原発は閉鎖する。

3. これから

原子力の平和利用の原発は良しとしてきた時代から、原子力の時代を終わらせる新たな動きが求められています。子どもや孫に安心して生活できる心豊かな新たな時代へとバトンタッチできるかどうか、今まさに問われています。

反核・反原発運動は、“ヒロシマ・ナガサキを繰り返してはならない”、“チェルノブイリを繰り返してはならない”と活動を展開してきました。しかし、残念なことにフクシマ事故で深刻かつ大規模な汚染とヒバクを繰り返してしまったのです。

日本は、広島、長崎の被害国だけでなく、地球環境を汚染する加害国となってしまったのです。この事実を重く受け止め、もうこれ以上のヒバクシャをつくらないというスローガンを体に焼き付けていかねばなりません。

60歳を過ぎた私自身、命をかけて、電力、国の責任を追及し、国家責任に基づくヒバクシャ援護体制（健康診断、健康管理手帳の交付、被害の補償など）の確立を目指さなければなりません。同時に、原発の停止から廃棄をめざして闘わねばとおもいます。

このことが、次の世代へ胸を張ってバトンタッチできる姿であろうと強く思うものです。そして、世界に向けて国際的な責任を果たし、国際連帯を推し進めることができる一翼となるのではないのでしょうか。

～ベラルーシの友人からのメッセージ～

{汚染地クラスノポリエからのメッセージ}



**親愛なる友人である
「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」の皆さま！
山科さん、かつみさん！**

不安と深い心の痛みをもって自然災害に関する日本の状況を見守っています。家族や親しい人たちを亡くした深い悲しみを共に感じています。何か助けになればと思っています。皆さんは、強く、粘り強く、勤勉な民族であり、すべての苦難を乗り越え、失ったものを復興できるということを確認しています。

私たちは皆さんと共にあります！

地区の病院、「ソーヌシカ」、中学校、ジムナジウム、社会シェルター（プリユート）、障害者リハビリ・成長センターの従業員たちと、多くの友人と知り合いを代表して。

「クラスノポリエ地区中央病院」院長

G.E.モロゾフ

ベラルーシ

クラスノポリエ

2011年3月26日

{ミンスクの「移住者の会」からのメッセージ}（第1報）

**親愛なるかつみさん
親愛なる日本の友人の方々**

3月13日ミンスク在住のチェルノブイリ原発のゾーンからの移住者たちは集会を開き、マンションごとの責任者が事態が収まるまで日本の子供たちを自宅にホームステイさせることのできる家族のリストをまとめることを決定しました。

皆さんのお子さん方を私たちが自分の子のように受け入れることができますので、どうぞいつでもお声をかけてください。

私たちの朝はニュースを見て、日本の状況をチェックすることから始まります。

この恐ろしい時に、私たちは皆さんと一緒にです。私たちは皆さん全員のことを考え、神の慈悲を請い、災難から立ち直れるように祈っています。

移住者代表 ジャンナ・フィロメンコ

【「移住者の会」からのメッセージ】（第2報）



**親愛なる日本の友人の皆さんへ！
親愛なるかつみさんへ！**

私たち、ミンスクに住む、1986年にチェルノブイリ原発事故の事故処理作業従事者と移住者、被害者は皆さんのことをとても心配していて、恐ろしい地震の甚大な被害に遭われた国民の方々を深く悲しんでいます。

放射能汚染の状況が一刻も早く改善することと、福島原発1の事故が起こった原子炉で働いている事故処理作業従事者の方々に健康、何より健康、そしてもう一度健康をお祈りいたします。日本人の方々の勇敢さ、粘り強さ、道徳の高さに感動しています。

日本では桜が咲くこの春の日、自然が困難を克服するのを助けてくれるでしょう。そして私たちは自国ベラルーシで神に祈ります。

かつみさん！ ミンスクの公園に立つミンスクの姉妹都市仙台にあてた記念碑の写真を送ります。

連帯の印にこの公園に何千もの人々が花やロウソク、折り紙を持って訪れています。私たちベラルーシ人はこの辛い時に皆さんと共にあり、幸運を祈っています。

心からの感謝をこめて、移住者代表ジャンナ・フィロメンコ

【チェルノブイリ原発事故被災地の子どもから フクシマ原発事故被災地の子どもたちへ】

日本の同年代のみなさんへ

ベラルーシからワレンチーナが手紙を書いています。私は14歳です。私はクラスノポーリエという、ベラルーシの多くの他の町と同じようにチェルノブイリ原発で被害を受けた町に住んでいます。

3月11日に起こった恐ろしい悲劇は私たちの心の中に痛みと被害を受けた方々への深い悲しみを呼び起こしました。原発事故で漏れた放射能がこれからもっと健康被害を産むことを私たちは知っています。毎日マスコミの報道で日本人に起こった悲劇について聞いています。起こってしまったことを遺憾に思っ、悲しみを共有しています。

私と私の友達たちはすべての被害者の方に哀悼の意を表します。このようは不幸が二度と起こらないように願っています。被災地の一刻も早い復興と明るい将来の展望を心よりお祈りします。

マリュシェフスキー・ワレンチン
ベラルーシ共和国モギレフ州クラスノポーリエ

尊敬する日本、大阪、「関西の人道・社会団体」のみなさまへ

すべての子どもを代表して、みなさんからのノヴォキャンプでの休暇への人道支援に対して心から感謝します。これは忘れることのできない休暇でした！ 毎日、毎時間プログラムがありました。

僕たち全員は、文字通りすべてのものがとても気に入り、楽しく、心地よく、快適でした。僕たちは様々なコンサート、コンクール、クイズ、スポーツゲームに参加しました。様々なサークルに参加しました。一言でいえば、退屈する暇がありませんでした。食事はすばらしく、すべておいしく、健康的でした。私には友達がたくさんできました。時間があっという間にすぎ、振りかえる間もなく、帰る日が来てしまいました。誰も家に帰りたがりませんでした。

2011年3月11日に起こった出来事について、子どもたち全員から日本人のみなさんに、特に近い人を亡くした人に深い哀悼の意を表します。また、怪我をなされた方の一日も早い回復もお祈りします。日本とその国民はこの悲劇を乗り越え、普段の生活に戻れると願い、信じています。私たちはとても心配しています。何か助けになることをしたいと思っています。

クラスノポーリエに遊びにまた休暇に来てください。

マクシム・ゲラシェンコ
モギリョフ州クラスノポーリエ市

「ノヴォキャンプ」に参加した子どもからのメッセージ

天気は最高！ 太陽は明るく輝き、空は青く、鳥は歌い、風は爽やか。今日はノヴォキャンプと呼ばれるサマーキャンプの一日目だ。僕たちはこのサマーキャンプにやってきた瞬間から色んなイベントや遊びでわくわくさせられた。キャンプはとても楽しく、ロシアの子どもたちだけでなく、ベラルーシからも子どもたちがやってきていた。キャンプではとても温かく迎えられ、たいへん優しく接してもらった。キャンプの門をくぐったらすぐにコンクールが始まった。コンクールの一つはこんなのだ。手を絵の具に浸して、大きなアルバムの紙に自分の手形を押して、名前を書く。その後グループごとに分けられる。グループは6つあり、僕とマクシムは第2グループに入った。まず初めにリーダーと知り合いになった。彼らはヤーナ（18歳）とジーマ（19歳）といった。ジーマは荷物を宿泊場まで運ぶのを手伝ってくれ、僕たちが過ごす部屋を見せてくれた。僕たちが荷



ほどきを始めると3人の男の子が部屋に入ってきた。彼らはマクシム、ジェーニャ、ワーニャといった。彼らと自己紹介し合って、仲良くなった。その後食堂へ行ってご飯を食べた。そして宿泊場に戻ってきて遊んでから眠った。次の日の朝僕たちは宿泊場の周りを掃除し、そしてサークルに登録しに行った。僕は焼き絵と彫刻のサークルに登録した。そして、そのサークルに通っているいろんな作品を作った。毎日キャンプはどんどん楽しくなった。僕たちはいろんなコンクール、クイズ、コンサート、そして体を動かすゲームに参加した。でも残念ながら時間はどんどん速く過ぎて行ってしまった。プールにも3日に1度入った。そしてどんどん帰るまでの時間が短くなってゆき、本当に帰りたくなかった。ノヴォキャンプはとても素晴らしいキャンプだった。

パーヴェル・アンチペンコ

ノボ・キャンプはロシアのNGO「ラドミチ」が運営している非汚染地域でのユニークな夏キャンプ。クラスノリエの子ども達も保養に出かけ、「救援関西」も資金援助しています。

4月26日 街頭行動と関西電力へ申し入れ

田中章子

毎年4月26日には「繰り返さないで！チェルノブイリ」の思いを込めて、関西電力に申し入れをしてきました。

今年は申し入れだけではなく、ベラルーシからお招きする先生と大学生に原発事故被災地の実態と思いを語っていただくと関西電力に連絡していました。毎月26日ランチタイムに関西電力行動を行っているグループと連携する企画でした。ところが福島第一原発事故のせいで二人の訪日が中止となりました。

今年チェルノブイリ原発事故25年の節目に、これまで以上に原発の危険性を伝えようと考えていた私たちにとって、福島で起こったことはあまりにも衝撃が大きいもので、3月15日には関西の市民グループが関西電力へ「今すぐ全ての原発を止めて」と緊急申し入れをしました。“チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西”も関西電力本社前アピールを行いました。市民の思いに対して、関西電力担当者は「当社は安全対策を強化し原発を稼働させ続けます」と臆面もなく言っていた。私たちは「公開討論会を開き、関西電力の原発の地震津波対策をきちんと説明し、市民の質問に答え、意見を聞くべきだ」と主張しましたが、はかばかしい返答が得られず、いつもに増して固い関西電力の対応に、集まった市民の怒りは沸騰。

このような経過があったので、多くの市民グループに4月26日申し入れに参加し、ともに公開討論会開催の要求をしていただきたいと呼びかけました。

26日はまず大阪駅前、横断幕を上げチラシを配って、道行く人々に「原発止めよう」を呼びかけました。「やっぱり原発は必要でしょう」と言う方と意見のやりとりも。そのあと関西電力前まで歩きながらチラシを配りました。

関西電力には今回が初めての方も数人みえて、30人以上の人が集まり、やはり関心が高まっているのだと感じられたことです。

それぞれのグループが申し入れを行い、討論に入りました。当然私たちは「地震多発期に入った



関西電力本社前にて

今、福島原発事故は決してよそごとではない。事故が起こる前に原発はやめて」それが無理ならせめて「安全が確

認できるまでは全ての原発を稼働させないで」と訴えましたが、関西電力広報部は「今できる安全対策

を急遽行ったので、心配はない」「原発は止めない」「公開説明会も開かない」とまたしても非常に強硬な態度に終始しました。

「私たちは公開説明会を開かないことは受け入れられない」「市民に対して説明義務を果たしてほしい」と市民の要望を伝えました。もちろん要望しているだけでは埒が明かないので、関西電力が「個別の面談は受けるが公開討論会は開かない」と言うなら、市民のジワジワ活動で扉を開き、面談の場を自前公開討論会にしてゆくつもりです。

そして あらゆるところでチェルノブイリの警鐘を鳴らし、大事故が起こる前に関電の原発を止めてしまいましょう。関西ではそれがまだ可能なのです。

2011年4月26日

関西電力株式会社社長 八木 誠 様

チェルノブイリ原発事故25周年、福島第一原発事故にあたり

関西電力への申し入れ

若狭の原発を即刻停止し

再生可能エネルギーへの転換を求めます

本日で旧ソ連で起きた史上最悪のチェルノブイリ原発事故からまる25年が経ちます。この節目の年に東京電力・福島第一原発で重大事故が起こり、極めて深刻な状況が続いています。

私達は24日「チェルノブイリ原発事故25周年の集い」に集まりました。集会では福島原発重大事故の概要、放出放射線量とヒバク、ベラルーシの支援・交流先からの事故後25年目の報告、さらに福島原発重大事故により放射能の高濃度汚染地となってしまった現地の深刻で複雑な状況などの報告がなされました。熱心な質疑応答とこの深刻な原子力災害を前にして今後どのような取組みをしていったら真剣な討論が行われました。

福島第一原発では事故発生から1ヶ月半も経つにもかかわらず、依然として深刻な状況が続いています。東電により原子炉安定まで6～9ヶ月かかるとの工程表は示されたものの、その前には難題が山積しています。現場での作業は高濃度の被曝を伴いながらの労働者の必死の努力にもかかわらず、高濃度の放射能汚染と余震も頻発する過酷な環境のもとで、困難を極めています。既にチェルノブイリの10分の1もの放射能が放出・垂れ流され、空気を大地をそして海を汚染しています。チェルノブイリをも超えるような大量の放射能放出の危機も去っていません。また被災地ではチェルノブイリと同様なことが繰り返されています。人々は放射能と向き合う生活を余義なくされています。周囲20km圏内は立ち入り禁止の「警戒区域」となり、高濃度汚染地域では「計画的避難区域」が指定されました。避難した人々は、先の見えない不安、生活や故郷を奪われた怒り、望郷の思いが募ります。また避難した人への差別的対応も報じられています。故郷への愛着から避難を拒む人もいます。「チェルノブイリの痛み」はまさに「フクシマの痛み」になりつつあるのです。「チェルノブイリを繰り返さないで」と訴えてきた私達は残念至極であり、断腸の思いです。チェルノブイリの被災地では25年経った今も「チェルノブイリの傷跡」は決して癒えることはありません。

関西電力に申し入れます。全ての原発を即刻止めて下さい。八木社長は電気事業連合会会長就任の会見で、「原発は大切な電源」と強調したと報じられています。福島原発での惨状と危機的状況を目の前にして全く信じがたい言葉です。本当に貴社の言われるように「安全を最優先に」というのであればまず原発を止めるべきではないでしょうか。日本中、地震が頻発する中、若狭の関電の原発も安全ではありえません。防災対策の見直しなどですむ話ではないのは誰の目にも明らかです。コントロールの出来ない核による原発はもう要りません。絶対に第2のフクシマを起してはなりません。今すぐ貴社の全ての原発を止めて下さい。そして太陽光や風力などの再生可能エネルギーへの転換を図ってください。以上強く申し入れます。

「チェルノブイリ25周年の集い」参加者一同

6.11 脱原発 世界同日アクション

原発いらん！ 関西行動 第2弾 (雨天決行)

— 関電は原子力からの撤退を —

集まろう！ 中之島へ 届けよう！ 原発やめての声を

一人ひとりの思いを込めて、家族や友人との寄せ書きやグループの要請文を書いてきてください。当日、集会時に集めて、後日、代表団が関電に届けます。

とき 6月11日(土)

集会 中之島剣崎公園 2:00~2:30

(中ノ島公園東エリア)

デモ 御堂筋南下 3:00~4:30

*メッセージ：福島より

*アピール：福井より

*太鼓伴奏

ニュース発行：チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西事務局

〒546-0031 大阪市東住吉区田辺 1-9-12 山科方

「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」

郵便振替：00910-2-32752